

# 調査成果の統合と先史時代人類誌の概念的枠組み

小野 昭\*

## 要 旨

現在進行中の研究プロジェクト「ヒト—資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」にある人類誌の用語について、書誌学的な変遷を整理し、民族誌考古学的接近を検討し、それと先史時代人類誌の用法の違いを明らかにした。復元された対象的世界は具体的な民族誌でないこと、したがって中立的な人類誌の概念がふさわしいことを記した。古環境の復元など自然科学との緊密な協同研究で進めるプロジェクトでは、諸成果が対応しない場合、無理に人類史の復元として欠けている部分を覆う必要はない。対応関係が明確になっている部分で先史時代人類誌として、資源環境と人類の緊密な対応関係を事例研究として提出する戦略をとるほうが実践的であることを論じた。

キーワード：先史時代、人類誌、民族誌考古学、隣接諸科学、類比

## はじめに

筆者が研究代表者として、2011年度から5カ年で研究を開始した大型研究（私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）の研究課題は「ヒト—資源環境系の歴史の変遷に基づく先史時代人類誌の構築」である。本稿の目的の第一は、人類誌という用語の書誌学的な経緯を簡単に記し、考古学が現生の民族誌事例からどのような問題意識で過去に接近しようとしたかを事例で示すこと。第二は、人類史でなくあえて人類誌を使用した理由を記すこと。第三は、古環境復元のための花粉、珪藻、植物珪酸体、火山灰などの分析、また全領域を横断的につなぐ年代論などの成果が統合される場合、それと先史時代人類誌はどのような関係に立っているのかを予備的に検討することである。

人類誌 Anthropography という用語の使用については、以下書誌学的に見てもすぐわかることであるが、現在、文化人類学、社会人類学の世界では使用されておらず、専門分野の辞典にも記載がない。ここで問題にするのは、直接的な参与観察ができないはるか過去の事象である。したがって本来は、人類誌を一般的にあるいは総

論的に検討し、その特殊形態として先史時代の場合を検討するのが正当であると思われる。しかしここでは具体的に考古学の資料に引きつけて想定しやすい特殊を先に検討する。ここから一般に這いあがるか否かはまた別の問題である。

## 1. 用語としての人類誌

### 1-1 人類誌の初例？

考古学の分野でも人類誌の用語は使われていない。筆者の知る限り『人類誌集報1997—漆利用の人類誌・飛騨山峡の人類誌』（山田・岡澤1997）がおそらく最初であろう。山田昌久は考古学という用語（＝名辞）で枠をはめられることを回避しようとしているので、考古学での初例としてここで記載されること自体を批判するであろう。たいていの概説書は考古学を「遺物・遺構・遺跡」を通して「過去の人類の生活・社会」を考える学問であると定義するが、考古学が本当にそうした科学として十分に機能しているであろうか、また素材と目的達成に必要な要素が包括関係にあるのか充分検討されているであろうか、と山田は疑義を呈し、自らの問題意識を提起した。

\* 明治大学研究・知財戦略機構 明治大学黒耀石研究センター  
onoak@meiji.ac.jp

考古学の基盤を見つめ直すために以下5つの検討の試みを記している。1) 目的のためにどんな素材が必要か、2) ひとつひとつの素材が生きた料理はなにか、3) 時間と物質資料・人類活動の関係はどうなっているか、4) ひとつの研究の人類科学のなかでの位相はどうなっているか、5) 歴史という発想の限界と展望はなにか (山田・岡澤編 1997, p.1)。

そして、この検討のためのフィールドをいくつか設定している。調査は全て参与観察可能な場を選定している点が特徴的である。時間面では現在である。しかし民族誌調査とはせず、人類誌調査を始めることが記された。

人類誌調査という名称を設定した。しかし、人類誌という用語自体の定義や用法の有効範囲や限定、射程、説明能力などは議論されなかった。その後山田は各種の参与観察可能な調査の蓄積と実験考古学的調査を積み重ねてきているので、事後的にでも説明される必要があるだろう。したがってここでは人類誌という用語の使用例の初出であろう点だけを記すにとどめておきたい。

## 1-2 書誌学的メモ

専門分野の用語法を検討する場合、書誌学的な情報を整理すれば済むというほど単純ではない。しばしば用を成さない場合も多い。しかし、人類誌も一応の初出例などを見ておくことも間違いではないだろう。なお、人類誌は英語の anthropography と対応することが前提である。

今日普通に使われている英語辞書を見ると一例だけあげるが以下のようなものである。

・小稲義男 (編集代表) 研究社新英和大辞典第5版 1980年。

anthropography n. 記述的人類学 人類の現状論 (地理的分布, 人種的特性などを論ずる); 人類誌

つまり、人類誌は英語の anthropography と対応する。では anthropography が最初に使われたのはいつか。O.E.D. には初出が 1570 年とあり、初出例の意味と、その後の用例が示されている。

・The Oxford English Dictionary, Vol.1 Oxford, at the clarendon Press 1933.

Anthropography

1. A description of all the parts of the human body.  
*Obs.*

1570 DEE Math. Pref. 33. Anthropographie, is the description of the Number, Measure, Waight, Figure, Situation, and colour of every diverse things, conteyned in the perfect body of Man.

1839 Hopper Med. Dict., Anthropography..... a description of the structure of man.

2. The branch of anthropology which treats of the geographical distribution of the races of mankind, and their local variations; ethnography.

1834 Penny Cycl. II. 97

A series of anthropographie, of different epochs, would form the true basis of ethnography.

以上のように、Anthropography 自体は、1. にある人体に関する記述としての学の意味で 16 世紀の後半に初めて現れたが、2. にあるように 19 世紀の 30 年代には ethnography の基礎をなす意味で使われている。しかし、O.E.D.1933 年版では上記 1 の最後に *Obs.* とあるように、人体や人体の構造に関する意味は少なくともこの段階では廃語となっていることがわかる。

20 世紀の初めの辞書ではどうか。

・Funk & Wagnalls New Standard Dictionary of the English Language upon Original Plans. Funk & Wagnalls Company, New York and London, 1914. では、

1. The branch of anthropology proper that treats of the geographic distribution, variations, and peculiarities of the human race or its component parts; descriptive anthropology.

2. A description of the physical structure of man.

とあるように、形質人類学の意味は後退している。

・最後に、Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged, G. & C. Merriam Company, Publishers, Springfield, Massachusetts, U. S. A., 1963. では、

Anthropography

A branch of anthropology dealing with the distribution of the human race in its different divisions

as distinguished by physical character, language, institutions, and customs - compare ANTHROPOLOGY, ETHNOGRAPHY とある。

これを見る限り、16世紀後半から使用され、現在の人類の人体ないし形質的特徴の記載の意味で19世紀の30年代末まではこれが継続した。しかしその後、理由は不明であるが、次第に現代の人類を対象とした人類学の一分野で、人種の地理的分布や地域的変異を扱うものとして意味が変わってきている。Ethnographyとしての意味が強くなってきたことが分かる。意味論上の変化はあるが、共通しているのは、時間軸で切ってみると現在という時間面上のことである。過去への適用は意識されていない。

## 2. 先史学への適用

さきに見た山田昌久は「考古学が考古学であるためには、人工物を素材とすることにこだわるか、必要な素材を集めに行くかということになる。どちらも考古学になるだろうが、素材の選択時に料理（目的）は大筋で決まる」とまで言っている（山田・岡澤1997,p.1）。しかし、筆者のみるところ、素材と目的は相互規定であって、どちらかが一方的に優先して決定されて研究が実行に移されることはまずないであろう。両者の間を何往復かして素材が限定的に選択され目的も縮小されたり変形されたりするのである。調査対象の時間面を現在ないし採話可能な近過去に限定すれば、素材の選択の範囲も広がる。

先史時代の旧石器時代を例にとれば素材が限定されるので、目的設定は素材から帰納的に追究する可能性の糸が切断されない範囲に線引きされるのが普通である。ただ、それを突き破ろうとして、類比をたよりに民族誌例の適用や、考古学の復元目的に沿った民族誌調査が進められてきたのである。参与観察できる現在の時間面から対象とする先史時代へのフィードバックが可能であることが前提である。

### 2-1 2つの例

A. ルロワ＝グーランとL. R. ビンフォードの例を簡単に見るが、この二人の例をあげることが比較の上で適切

であるかどうか、いまは問わずにすすむことにする。前者は発掘して目の前に現れた状況を民族誌例のように過去から現在にプロジェクションを行おうとする試みであり、後者は現在の民族誌を行動学的な因果関係を軸としてモデル化して過去の発掘データ（遺跡）を解釈する試みである。手法は異なるが過去の人類の生活に焦点を結ぼうとしている点は共通する。

#### 2-1-1 A. ルロワ＝グーラン

パリ郊外モンロー近くのセヌ川左岸にあるパンスヴァン遺跡の最初のまとまった報告書は、1966年に刊行された(Leroi-Gourhan et Brezillon1966)。パンスヴァン遺跡が世界中の旧石器研究の世界で著名になったのはこのモノグラフによる。石器の接合による剥片剥離の復元だけでなく、主としてトナカイの骨角の解剖学的部位ごとの詳細な分布の分析によるマグダレニアン後半の人々の生活にせまる報告は大きな衝撃を与えた。ルロワ＝グーランはこの中で、礫、フリント、石器、剥片、骨、角、牙などの分布型を議論するところで「民族学的要素」の用語を使っている。住居No.1に関する記述では、居住の季節と期間、住居の性格、製造技術、獲得技術、食糧、快適さとしての暖房、明かりとり、内部空間をそれぞれ項目をたて、全体を「住居No.1に関する民族誌的な総括」として大項目でくくっている。

民族学的要素と民族誌的総括において、民族学と民族誌がこの文脈においてどう使い分けられているか特に何も説明がないので、根拠を特定できない。はるか過去の短期日の時間帯における住居を中心とした生活の諸相を、あたかもそこに居合わせたかのような復元を「民族誌的」と表現したのであろうことは想像できる。しかしルロワ＝グーランは特定の民族誌例を引いてそれをモデル化して解釈する方法は採用していない。

#### 2-1-2 L. R. ビンフォード

ビンフォードは1960年代に論理演繹的な方法によって先行研究への過激な批判と課題への批判的切り込みによって多くの問題を提起した(Binford and Binford 1968)。しかしその後、1970年代には民族誌調査による成果を使った解釈モデルの構築による過去の現象の理解へと大きく研究を転換する。いわゆる中位研究あるいは中位理論(middle range research /or middle range

theory) と表現されるアプローチの展開である。その学問の特長を裏側から規定するならば以下の5点にまとめることができる。

- 1) 特定の地域を限定し、その中における文化の変遷を解明するいわゆる文化史的な研究法はとらない。
- 2) 時系列を限定した地域内の比較論や地域間の比較論をおこなわない。
- 3) 構築したモデルは、一事例の分析から一般論へと展開させることが前提となっており、適用の地域的境界は原則的に存在しない。それは問題の焦点が、発掘によって現場で得られる考古学的記録の分布などが、なにゆえ、そこにそのような状態で存在していて、それ以外ではあり得ないのかを、現在の事例（民族誌例、現在の動物の行動、目の前で追証しうる自然の営力など）によって因果的に説明しようとするところにあるからである。
- 4) したがって「個別」と「一般」の間が存在しない。地球上の一点の個別事例から抽出されたモデルは、即地球上のどこにでも一般に適用し得るモデルとして提起される構造になっている。つまり認識論上の「特殊」段階がない。
- 5) 民族誌のある行為の結果のパターンを対比して、もし似ていれば、恐らくそういう行動をしたためにそれが残ったのだらうと推定する。行動のレベルにおける「斉一性の原理」uniformitarianism である。当時の社会構造を問題にするのではなく、人間の行動の低位の次元では対応しているという判断である。

ヌナミウト・エスキモーのモノグラフは徹底して記載的であり、復元図などはついていない (Binford 1978)。しかし、ビンフォードが1980年10月から81年1月までイングランドでおこなった講義や講演をまとめた『過去を追跡する』では、豊富な図や写真を入れて、本人がそれぞれの時点でどのような問題意識にもとづいて何を実践し、成功とともにどのような失敗をしたかがリアルに語られている。そのため民族誌と対象とする過去の関係をどう考えていたかを知ることができる (Binford 1983)。

それによると、論争中の相手であったF. ボルドのもとで1967年から翌年まで、ボルドが調査したコム・グ

ルナル遺跡のデータを徹底的に再調査した。しかし、「なぜそこに、そうあるか」については、データの集積は、われわれに十分な情報を語らない。自分がやってきた方法は、説明のためのポテンシャルを持っていないことを思い知らされ失敗を自覚する。考古学者は過去に関心を持つが、考古学的記録は静的であり現代のものである。それは自分とともに現在目の前にあり、観察するのも現在の自分である。過去の過ぎ去ったダイナミックな局面にどのようにして推論を架橋できるのかと。もちろんここには誇張がある。考古学の記録は静的であり情報自体は語らない沈黙資料であることは、文字史料との関係で対比される考古学の方法論の基礎であり、出発点で誰もが頭に叩き込まれることである。

この自問から1969年には極北のエスキモーの調査に出かける。その理由は3点ある。

- 1) ムステリアンの遺跡のトナカイの骨の調査をボルドーでやってきたが、エスキモーも同じトナカイの狩猟民であること、2) 狩猟による食糧に多くを依存して生きている集団の研究が可能であること、3) 極北の環境はフランスの遺跡が残された環境と全く異なっていないことであった。

目指すこの考古学を、民族考古学 Ethnoarchaeology とビンフォード自ら記している (Binford 1983, pp.100-101)。ビンフォードがこういう表現をしたために、その後ほとんどの研究者は日本語では「民族考古学」、英語で Ethnoarchaeology と表現するようになった。しかし、筆者は民族誌考古学 Ethnographic archaeology と表現されるべきであると考えてきた。民族誌を使うか、民族誌的調査をおこなってこれに依拠するのであるから、民族 ethnoではなくあくまで誌 graphy である必要がある。

## 2-2 民族誌を過去へフィードバックさせる可能性

調査する民族誌事例の気候条件、生態的条件などいくつかの基本的な条件が、適用する過去の大づかみな条件と整合することを前提として担保できた場合、過去へのフィードバックの可能性を支えているのは、行動学的類比である。つまり現在の民族誌例で、ある人数の男たちが、一定期間、ある場所で、トナカイの狩猟解体行為を

おこなったとすると、人数、性差、期間、場所特性とそこに残される動物遺体の状況のパターンは、行動学的因果関係の結果として、条件が整えば観察可能である。同じパターンが例えば旧石器時代の遺跡で観察されれば、同じような行動があったと推定可能であるとする。つまり類比 analogy である。

ビンフォードの場合さらに特異な認識の前提があるようである。長いキャリアの中で普通の考古学者が行うような発掘は、筆者が知らないだけかもしれないが、実施していない。それは先に一瞥したように、「考古学的記録は現代のものである。それは自分とともに現在目の前にあり、自分がおこなういかなる観察も現在の観察である」と主張していることと関係するかもしれない (Binford 1983, p.100)。だがこれは研究主体が現在を生きる研究者であることを表現しているにすぎない。過去の物的対象資料がなければ現在の研究者が記録を残すこともかなわない。記録するのは現代を生きる考古学者である。旧石器時代人たちが、キャンプし石器を製作したそのときは、そのときの「いま」である。

したがって「他者とは、事実、他人である。いいかえれば、私ではあらぬ私である」という表現 (サルトル 2007 < 1943 第3部第1章) に媚を呈して言えば、「過去とは、事実、過去である。いいかえれば、いまではあらぬいまである」。その時の「いま」と、研究者がそれを観察する時の「いま」をないまぜにして、「いま=現在」とするビンフォードの言い方は一種のレトリックである。峻別して類比の橋を渡らなければならない。

民族誌考古学の方法は、民族誌例から過去の社会構造を直接フィードバックさせるやり方や、無媒介に研究者の頭の中である状態をひねり出したりする想定よりは、学問的な検証に開かれた系を示しているといえるであろう。

問題は、民族誌例を使って過去のある小集団の残した痕跡を、行動学的な類比で因果関係を復元しようとしたとき、方法としての民族誌考古学のアプローチはわかるが、解釈された対象の世界は何を現わしているのかということである。民族誌考古学の方法だけでなく、実験考古学の方法をふくむ中位研究は、行動の斉一性原理を前提とした、認識の実体論的段階における、人間行動の因

果帰属モデルの研究である、と筆者の立場で位置付けたことがあるので、これにはそれ以上立ち入らない (小野 2001, p.274)。

解釈を帰属させるにあたり依拠するデータは具体的な民族誌例である。それを適用し解釈する対象は例えば旧石器時代のある遺跡・遺物である。対象とする世界は忘れ去られた不可逆的な過去であるので、具体的なエスニック・グループを特定できない。例えば中部ヨーロッパのマグダレニアン期の集落の痕跡を目の前にして、今日ないし近過去の民族誌のデータで説明をつけた場合でも、目の前の痕跡を残した人々は適用した現在の民族誌を担った人とは全く関係がなく、行動の類比が両者を結びつけているだけである。

民族誌考古学は方法論を詳細に議論してきたが、復元される対象的世界の意味論は解明してこなかったと言っているのではないか。それは永久に失われているために民族誌でもなく、小集団の即自態でもなく、抽象的で中立な「人類誌」でしかない。人類誌として理解することが、民族誌考古学にありがちな決定論的復元を回避する用語上の手立てでもある。民族誌考古学的方法によって過去へのフィードバックができたとする。それは説明ができたということである。説明 explanation が可能であるということは、そのようであった可能性があったということであって、それ以外ではあり得なかったという必然性や決定論的な解明ではない。決定論ではなく説明が可能となった一つの仮説である。先史時代に適用される人類誌の用語は、具体的な因果関係の説明が可能となったとしても、その意味論は中立的な位置付をしておくべきであろう。

### 3. 成果統合における異なる階層と先史時代人類誌

多様な分野との調査の協同をおこないながら進めるプロジェクトでは、具体的には古環境復元のための花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、種子分析、火山灰分析や、個別の分野に限定されず領域を横断する年代論などの成果が最終的に統合される。その場合、それらの成果と先史時代人類誌はどのような関係に立つのであろうか。

諸分野の成果を統合する際に重要であるのは、物質の運動形態の階層論と個別の科学の分野における有効な時間幅の2つである。これにより相互の共通性と差異を了解することで全体の構造が明晰になる。

発掘やボーリングによって回収される試資料に共通するのは、無機対象（火山灰など）であろうと有機対象（花粉や珪藻から人工遺物まで）であろうとまず堆積物である点である。本来の分解能が数時間か、1年か、数年かなど多様であり、堆積物として地層中に取り込まれてからは保存の条件によって本来の分解能が保たれなくなっているのが普通である。理化学年代はこれとは別原理である。測定法の違いによってその方法がもつ精度 accuracy を背負いながら堆積物の層序に数値が与えられる。いまから5000年以前に遡れば世界中で文字史料は無く、各種理化学的方法による数値年代に依拠せざるを得ない。

各分野の成果を編年の一覧表にプロットすると、解明できた部分と空白ができる部分などさまざまである。トレンチ調査やボーリングによる連続コアでは、堆積物が連続してうまく採取された場合、岩相層序 lithostratigraphy は腐食されにくいので連続的な図が描けることが多い。生層序 biostratigraphy は保存が悪ければその部分は欠ける。考古層序 archaeostratigraphy とは文化層中に包含される考古資料で年代推定の指標になる遺物をさすが、遺跡地であっても堆積層中の全層準に連続して発見されることは稀であるので、堆積が自然の営力による場合、うまくいって堆積層中に何枚か確認される程度である。そのため考古資料を一覧表にプロットすると、何枚かの文化層が書きこまれるが、文化層と文化層の間は文字通りブランクである。

考古学の成果を中心に統合する際、特定の文化層（例えば後期旧石器時代のある段階、縄文時代の各期）のさまざまな事実が解明され、コンパイルされた編年表を横にたどると、Aの分野の成果は対応するが、Bの分野はデータが欠けている、Cの分野はデータこそ出ているが分解能が低い、Dの分野のデータは年々変動を示していて分解能が高過ぎて、人類活動とは対応しない、等さまざまな凸凹が生ずる。

従来はこうした状況であっても人類史の復元として、

隙間だらけでも欠けているところは文章でつないできた。人類活動を自然環境の変動、特に資源環境系との関係で問題にしてそれを成果として打ち出そうと構想するときは、たとえ時系列を貫くような連続的な記述ができなくても、対応のしっかりした部分で事例的に記述するようにして、対応関係により慎重であるべきであろう。その場合は欠けた所の多い人類史ではなく、先史時代人類誌として事例復元を試みるのが重要である。古環境を復元するデータが良好であるが対応する人類遺跡の文化層が無いときは、当該地域における自然史（古環境史）として成果を打ち出す戦略を構築すればよいと考える。

## 結 論

以上の初歩的な検討を踏まえ、論の帰結を記す。

- 1) 人類誌 Anthropography は文化人類学、社会人類学では、専門用語としてはほとんど使われていないが、民族誌に近い規定も書誌学的にはある。ただ、いずれも用法としては時間軸上の現在の時間面で問題を立てている点が特徴的である。
- 2) 民族誌から過去へのフィードバックは類比 analogy 概念の応用で可能であり、従来考古学的には民族誌考古学として実践されてきた。しかし適用され復元される対象的世界の意味論は等閑視されてきた感がある。先史の過去は民族誌としては認識し得ない。人類誌として中立的・抽象的に構築されることが、民族誌考古学における復元の決定論を回避する用語的保証でもある。過去を対象とする際は具体的な民族やエトスを扱えない。それは具象から抽象された何ものかであり、アントロポスとして具体的なエトノスから離れた存在である。

したがって、人類誌の頭に先史時代をつけた、先史時代人類誌は、「研究者が参与観察できない過ぎ去った先史の過去を対象とし、考古学の方法で具体的に扱われる物的存在ではあるが、その性格は特定の民族や民族誌に帰属しない中立的な資料群である」と一応の定義をしておきたい。これが概念的な内包である。外延は世界各地に存在する先史時代の遺跡が含まれる。

先史時代などの限定がつかない人類誌は、これと対比するならば、先史世界に限定されない、いわば限定の緩く、したがって内包は狭いが、参与観察可能な現代から過去へ広がる史的世界全体を含む広い外延を有すると理解できよう。

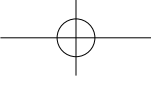
- 3) 古環境の復元など自然科学との緊密な協同研究で進めるプロジェクトでは、諸成果が対応しない場合、無理に人類史の復元として欠けている部分を覆う必要はない。対応関係が明確になっている部分で先史時代人類誌として、資源環境と人類の緊密な対応関係を、事例研究として提出する戦略をとるほうが実践的である。先史時代人類誌は、民族誌考古学的方法、つまり特定の民族誌をモデルとして過去にフィードバックさせるやり方だけでなく、ルロワ＝グーランが実践したように遺構・遺物の解析から接近する場合にも実現が可能である。

#### 謝 辞

パンスヴァンの報告書のルロワ＝グーランの記述については山田昌功氏に負うところが大きい。記して感謝申し上げる。また、人類誌の用語については、これを最初に用いて調査を企画し、その意図をご教示いただいた山田昌久氏に御礼申し上げたい。

#### 文 献

- Binford, S. R. and Binford, L. R. (eds.) 1968 *New Perspectives in Archaeology*. 373p., Aldine, Chicago.
- Binford, L. R. 1978 *Nunamiut Ethnoarchaeology*, 509p., Academic Press, New York.
- Binford, L. R. 1983 *In Pursuit of the Past: Decoding the Archaeological Record*, 256p., Thames & Hudson, New York.
- Funk & Wagnalls 1914 *New Standard Dictionary of the English Language upon Original Plans*, 2196p., Funk & Wagnalls Company, New York and London.
- Leroi-Gourhan, A. et Brézillon, M. 1966 *L'habitation Magdalénienne N° 1 de Pincevent près Montereau (Seine-et-Marne)*, Gallia Préhistoire Tome IX - 1966-Fascicule 2, pp. 263-385, C. N. R. S., Paris.
- 小野 昭 2001『打製骨器論 - 旧石器時代の探究 -』290頁, 東京大学出版会
- 小稲義男 (編集代表) 1980『研究社新英和大辞典』第5版, 2477頁, 研究社
- Sartre, J. P. 1943 *L'être et le néant: Essai d'ontologie phénoménologique*, Éditions Gallimard, Paris. サルトル, J. P. 2007『存在と無 - 現象学的存在論の試み -』II, (松浪信三郎訳) ちくま学芸文庫, 570頁, 筑摩書房
- The Oxford English Dictionary, Vol.1 Oxford, at the clarendon Press, 1240p., 1933
- Webster's Third New International Dictionary of the English Language Unabridged, 1963 G. & C. Merriam Company, Publishers, 2816p., Springfield, Massachusetts, U. S. A.
- 山田昌久・岡澤祥子 (編) 1997『人類誌集報 1997 - 漆利用の人類誌・飛騨山峡の人類誌 -』75頁, 東京都立大学考古学報告 2



# Integration of research results and the conceptual frameworks of prehistoric anthropography

Akira Ono

## Abstract

The term “anthropography” was discussed compared with “ethnoarchaeology” as well as with the bibliographical chronology of a word anthropography, concerning our ongoing project title: Historical variation in interactions between humans and natural resources: towards the construction of a prehistoric anthropography.” A difference between anthropography and prehistoric anthropography is also clarified. As the reconstructed prehistoric world is not a concrete ethnography, a neutral term anthropography will be more adequate when discusses the prehistoric objects. Research results among collaborative projects with various disciplines including archeology and natural sister disciplines sometimes face with integration issues. Reconstruction as a prehistoric “human history” should be avoided when the various data have not well organized each other. It should be a feasible strategy integrating by the term “prehistoric anthropography” when some parts have correlated well with each other between different research disciplines among the total data set.

**Keywords:** prehistory, anthropography, ethnoarchaeology, related disciplines, analogy